

学士課程で助産を選択する学生の 分娩介助10例における学び ～分娩介助実習体験を中心に～

松井弘美¹⁾，永山くに子¹⁾，島田啓子²⁾

1) 富山大学大学院医学薬学研究部

2) 金沢大学医薬保健研究域保健学系

要 旨

本研究は学士課程で助産を選択する学生の分娩介助10例における学びを明らかにすることを目的とし、現象学的アプローチを参考にした質的記述的研究である。本研究により以下のことが明らかになったのでここに報告する。

分娩介助実習における学生の学びの構造は以下のものであった。

『学生の分娩介助実習における学びは、初めての分娩介助において想像と現実の違いに、戸惑いながら分娩という現象を感じ取る。そして分娩進行状態の診断には産婦の身体状況を捉えることが必要であることを理解し、分娩進行を促進するケアを実践しながら、産婦に寄り添うことを大切にする。一方自己の分娩介助経験を振り返り、学びと課題を確認する。10例終了後に、分娩時の異常発生への対処はこれからの課題であることを認識するという過程である』

キーワード

学士課程，分娩介助，学び，現象学的アプローチ

はじめに

今日、周産期医療の危機的状況において助産師への期待は高まり、助産師としての専門性が求められる状況である。これを受け、助産師基礎教育においては、その内容が見直され、基本的援助技術の修得だけでなく、妊娠・分娩・産褥経過における心理社会的側面からの総合的なアセスメント能力の強化が求められ、教育の充実が必要となっている¹⁾²⁾。

現在の助産師教育は、大学院・大学専攻科・大学・短期大学専攻科・養成所と様々なコースがあり、中でも大学は2010年3月現在84校と最多であ

り、2010年新卒助産師1,577名中564名³⁾を輩出しており、助産師教育における位置づけは大きいといえる。また教育機関により卒業時の習熟度は異なり、大学においては看護師・保健師・助産師の3つの国家試験受験資格取得のため、やや過密なカリキュラムとなっており、助産学実習の期間も限られている。このような状況を踏まえ、助産師教育に関しては「助産学実習到達度に関するもの」「教育機関別にみるカリキュラム・実習の実態」などの研究⁴⁾⁻⁶⁾が行われているが、学生の学びの過程に関する研究は少なく岩木⁷⁾の分娩進行の把握に焦点をあてた学びの研究以外見当たらない。

助産学教育においては、学生は単に知識の習得としての学習にとどまらず、知識や技術を実際の対象に対して展開することが求められ、この授業形態が実習である。実習では多様な状況が顕在・潜在し、このような状況の中で学生は自分の生活経験とは異なる人々を理解し、直接関わることから学びを深めていく。特に学士課程で助産を選択した場合は限られた期間での学びとなる。このような実習では、一律に実習終了時の到達状況だけをとらえ評価するのではなく、形式的に評価し学生の状況に応じた教授活動を行うことが大切であり、そのためにはまず学生の実習での経験と学びを理解することが必要と考える。

看護系大学の統合カリキュラムにおける助産師教育に関する研究⁸⁾では統合カリキュラムにおける助産師教育の特徴として『実習内容の精選と充実』というカテゴリーが抽出され、段階的実習による実習内容の充実が必要とされている。段階的に実習を展開するためには、学生がどのような実習を展開しているのかその過程を学生の視点から捉えることが必要である。学生の学びを理解した上で展開する教授活動により助産師教育は充実するといえる。しかし、これまで現行の統合カリキュラムを前提とした学士課程における助産師教育において、学生の学びを学生の視点から捉えた研究はない。

以上のことより10例の分娩介助実習での学生の経験（現象）を解釈し、学生の学びの過程を理解することは、重要な課題であるといえる。そこで本研究では助産実習の中で、分娩介助10例の経過において、学生がどのような学びをしているのかを明らかにする。

研究方法

1. 目的

学士課程で助産を選択する学生の、分娩介助実習における学びを明らかにする。

2. 研究デザイン

質的記述的研究

3. 研究協力者

大学で助産を選択し研究趣旨に同意が得られた

学生4名

4. データ収集期間

平成20年8月～11月

5. データ収集方法

研究者は直接分娩介助実習に関わり研究協力者の状況を捉え、参加観察する立場にある。それを踏まえ半構成的面接にてデータを収集した。原則的に、教員という立場が学生に及ぼす影響は十分考えられるが、本データの特性からして、学生の学びを明らかにする過程で直接指導教員が面接するという形式をとった。面接回数は常盤ら⁹⁾の分娩介助における学生の実習時期別到達度を参考に、分娩介助1例後、3例後、6例後、10例後の計4回行った。学生が自分自身の実習での体験や学びの語りが促されるように、「今日の実習でどのような体験をし、その時に感じたこと、考えたこと、行動したことを話してください」という言葉を導入とし面接を開始した。面接は分娩介助実習の終了時間を考慮し、当日または翌日に行なった。面接内容は研究協力者の許可を得て録音し、逐次記録したものをデータとした。

6. 用語の定義

本研究で明らかにしたい「学び」は実習という経験から構成される学びであることより、A.Kolb¹⁰⁾の経験学習モデルを参考とし、分娩介助実習における学生の感情・考え・行動とした。

7. 倫理的配慮

助産の課程を選択し、研究者が実習を担当する学生4名に研究の趣旨及び研究参加の有無が実習の成績に影響しないことを説明した。同意を得られた学生4名に研究目的・方法、研究協力撤回の自由、研究協力を途中で中断しても不利益のないこと、研究結果の公表について口頭及び文書で説明し、同意書にて同意を得た。面接は研究協力者のプライバシーを厳守するため個室で行い、本人の了承を得て面接内容を録音した。得られたデータはすべて匿名化し個人が特定できないように処理した。

8. データ分析方法

本研究は学生の主体的体験を記述し、そこから共通性を見出すことを目的とすることより、現象学的アプローチを用いた。現象学は

E.Husserl^{11),12)} の記述的現象学の考えに基づき、『生きられた体験 (lived experience)』を統合的に記述することを目的としている。本研究は、現象学派の一人で科学的現象学的方法を提唱している A.Giorgi^{13),14)} の方法を参考に記述・解釈して整理した。この方法は個々の体験の記述から、一般的構造を導くことを目的としている。具体的方法は以下の通りである。

①体験の逐語録を読み、全体の意味を把握する。
②逐語録を読み、構成要素（意味の単位）をつかむ。
③構成要素を他の構成要素、全体の意味と関連づけることにより記述する。
④意味の中心となるものを、研究協力者の具体的な言語から引き出し、研究者の言葉で解釈する。
⑤4名の研究協力者の記述から学びの構造を導き出す。

9. データの信憑性の確保

データ分析・解釈は助産学領域の専門家のスーパービジョンを受けた。また研究者がまとめた体験の記述・解釈を研究協力者（助産学生）にフィードバックし、補足修正することで結果の信憑性の確保に努めた。

結 果

1. 研究協力者の実習経験の概要

表1は研究協力者の実習経験の概要である。分娩介助実習前に、学内にて分娩介助技術演習を行っている。また実習施設における分娩介助を1例見学した後に、分娩介助実習を開始している。研究協力者の分娩介助の対象産婦は、初産の割合は5例が2名、3例が2名であった。妊娠週数は全例正期産であった。分娩所要時間は最短1時間15分、最長21時間24分であった。児の異常はなかった。

表1 研究協力者の実習経験の概要

研究協力者 () 年齢	A (22)	B (22)	C (26)	D (23)	
助産関連の既習科目	助産概論 助産学ゼミナール 助産診断学 助産技術論				
実習前演習	分娩介助 (分娩見学含む)				
初産・経産 の人数	初産	5人	3人	3人	5人
	経産	5人	7人	7人	5人
分娩所要時間	最短	2時間15分	1時間15分	3時間58分	3時間1分
	最長	18時間38分	15時間49分	12時間35分	21時間24分
産科処置の有無	なし	なし	あり (鉗子)	あり (吸引・鉗子)	

産科処置として吸引分娩・鉗子分娩があった。

2. 分娩介助実習における学びの構造

4名の学生の学びから導出した、分娩介助実習における学びの構造は以下のようであった。

『学生の分娩介助実習における学びは、初めての分娩介助において想像と現実の違いに、戸惑いながら分娩という現象を感じ取る。そして分娩進行状態の診断には産婦の身体状況を捉えることが必要であることを理解し、分娩進行を促進するケアを実践しながら、産婦に寄り添うことを大切に。一方自己の分娩介助経験を振り返り、学びと課題を確認する。10例終了後に、分娩時の異常発生への対処はこれからの課題であることを認識するという過程である』

学びの構造の導出に至ったデータは次項に示す。

3. 『分娩介助実習における学びの構造』導出の根拠

前項では、分娩介助実習における学びの構造を導出した。本項ではその根拠となる学生の語りを「 」, 研究者の解釈を①～④に示す。

〈学生A〉

学生Aの分娩介助での学びは以下の通りであった。

1例目では、「はじめは眉間にしわを寄せる程だったのが声が出てきたり、いきみたいような息づかいが聞こえてきたりして、どんな風に分娩が進んでいくのかっていうのは、わかる。わかったのはすごい発見でした」と実際の分娩を肌で感じていた。が一方で「会陰の下の部分がちょっとだけきれて亀裂が入ってきたことが

わかったときにはすごい動揺した。ビーンと裂けるんじゃないかと、ビクビクして」と実際の会陰の伸展を見て動揺していた。また「今まで診断っているのは医師がするものだと思っていたんですけど助産師の領域では私達が判断しなければいけないことがすごく一杯あって」と医師の診断行為と同等の重さが助産師にあることを感じていた。さらに「なにも応えてあげられなかったことが、すごく悔しい」と産婦の問いかけに答えていない自分に気づき、産婦の不安に応えていきたいと思っていた。

①実際の分娩に立会い、戸惑いを感じながらも分娩という現象を肌で感じる。その中で生命の誕生に立ち会える喜びと助産師の責任の重さを感じた。一方、対象である産婦と関わっていなかったことに気づく。

3例目の学びを語る中で、産婦より知識や経験がない自分が産婦の側にいてよいのかという思いがあったが、「関われば関わるほど、お母さんの心の中ってというのは見せてくださるし、何でも話してくださるんだな」ということがわかって」と、陣痛室から産婦の側にいることで気持ちを理解できることを感じていた。そして「この人だったらちょっと疲れ始めていて、いきみがちゃんとかけられないかもしれないから、こういう所に注意しよう」と産婦の状況から予測し次の行動を考え、「どういうところに気をつければ、早く進んでいってもついていけるんじゃないかという見通しというか、ちょっとだけ見えてきた」と分娩経過の予測を立てることができると感じていた。

②分娩第Ⅰ期より産婦と関わることで産婦の身体状況や気持ちが分かることを実感し、産婦の心理的・身体的状況を捉えることで分娩経過の予測をすることができると分かる。

6例目になると、大体技術もできて、スタッフとも息が合っているというイメージがあったが、「何でまだできんがやろうというあせりもちょっとずつ感じています」と実際の自分はまだまだできておらず、期待する自分と現実の自

分のギャップに焦りを感じていた。その一方で、「お母さんにとって満足のいくお産をさせてあげられなかったということが根本にあって、お母さんが今困っているとか、きちんといきめてないな、それがすごく見えるようになりました。今まではわからないというか、その状態が正常か異常かとか、何を考えていらっしゃるかまでは全然考えていなかった」と産婦と向き合い、状況を捉えることができるようになったことを実感していた。

③イメージしていた6例目とは違い、まだまだできていない自分に焦りを感じる。しかし、産婦の状況が見えるようになり、分娩進行状態の正常性のアセスメントや産婦の心理的適応状況を考えられるようになる。

10例目は一つの区切りであり、今の自分にできることを行おうという気持ちで臨み、「完璧にというにはいかなかったですけど、産婦さんとの関係性とか声かけ、スタッフの方との連携などは着実にできるようになったんだろうな」と成長した自分を感じていた。その一方で「分娩進行の予測とか、児の娩出もまだまだ上手とはいえない」「異常についても、何か一つ起こってしまった時に、冷静に行動できるかというそれはまだまだできないと思う」と分娩進行の予測や児の娩出の技術はまだ未熟であり、異常時の対応についてはこれからの課題だと感じていた。10例を体験して分娩にはいろんな要素が絡みあって進んでいることがわかり「助産師はそういうものを調節しながら、またお母さんのバースプランを尊重しながら」分娩に関わっていくのだと感じていた。

④産婦との関係性の構築、スタッフとの連携はできるようになったが、分娩経過予測や分娩介助技術の上達や、異常時の対応は今後の課題であると自覚する。分娩介助10例を通し助産師の役割は分娩要素を調節し、産婦の意思を尊重してバースプランに沿った分娩になるよう関わることであると思う。

〈学生B〉

学生Bの分娩介助での学びは以下の通りであった。

学生Bは、1例目で導尿ができず尿が飛び散るという予想外の展開になったことで、「分娩を取り進めていく時、怖くて怖くて、本当に怖くて、途中でやめたいと思って」と怖いという感情が湧き出てきた。そして「正直に助産師って本当に大変、大変、大変と思ったのと、自分はずごい世界にはいつてきたんだなって」「命っていうことに対する責任感とか、きちんと判断できるようにならなきゃいけない」と新しい命への責任感と助産師の仕事の重さを痛感していた。

①予想外の展開に怖さを感じ、命への責任感と助産師の判断の重要性・責任の重さを痛感する。

3例目に臨むにあたり「本当に怖いし、2事例経験しているので3事例目に上手くいかなかったら助産師さんにどんな風に思われるかな」とプレッシャーを感じていたが、産婦の状況に合わせて呼吸法やマッサージ法を行うことで、「ちょっと関係が築けてきて、関係性が築けるようになったらお母さんとやっていこうと、赤ちゃんに早く会いたってという思いで、お母さんと一緒に思いでした」と分娩第1期から産婦と関係性がもてるようになると、産婦と共にやっていこうという気持ちになっていた。

②3例目というプレッシャーはあったが、分娩第1期から産婦と関わり産婦の状況に応じた産痛緩和の援助ができるようになり、産婦に寄り添うことができると感じる。

6例目では産婦さんが安心感を持てるような関わりを持つことを目標として「産婦さんへの声がけっていうのを特に注意してしました」「分娩が進行するように排尿を促したり、食事をとってもらったりとか水分を補給してもらった」と分娩進行が促進されるように考え、行動することができていた。しかし「6事例を通しての一番の課題は自分の考えていることをスタッフさんとか、産婦さんにパッと説明しなければ

ならないと感じて」「助産師さんと診断のズレはなくて、自分でも今ここかなと思ってやってるんだけど、口、言葉に出して伝えられてない」と自分の課題を確認していた。

③分娩進行には、産婦の基本的ニーズを充足する援助が必要であると考え実践した。6事例を振り返り、自分の考え、判断を声に出して伝えていないことが課題であると自覚する。スタッフとの連携、産婦とコミュニケーションをとり、産婦に安心感を与えられるような関わりをしたいと思う。

10例目になると、「産婦さんの表情とか、矢状縫合とか、内診結果とか、全部総合して分娩室入室時期を決定しなければならないということ学ぶことができた」と分娩室入室時期が理解でき、自分の動きの目安ができたと感じていた。課題であった連携は「助産師さんと連携するのは難しいなと感じてたんですけど、自分なりに結構がんばって連携をとることができた」と自分の成長を言葉で表現していた。しかし、「今回もちょっと心音下がってたけど、すぐ反応できなかったという部分あった。本当に一人だった場合自分の判断で、もし何かあったら本当に危険」「やっぱり一番はお母さんと児の安全」と異常時に対処できなかったことで改めて命を守ること、母子共に安全であることの大事さを感じていた。

④分娩進行状態を診断するには、必要な情報を総合的に判断し、予測することだとわかる。スタッフと連携をとることで自分の判断を確かなものとし、母子の安全を守ることが一番大事であると思う。

〈学生C〉

学生Cの分娩介助での学びは以下の通りであった。

1例目では分娩経過の予想がつかず不安と緊張状態であったが、「フリードマンの曲線を使って予測時間を立てても、内診結果だけじゃなくて、いきみたい感じだったり、怒責とか、あと産痛の部位がどこにあるかによって、その後の

展開が変わってくる」ことに気づき、「産婦さんの言ってらっしゃることを統合してアセスメントしていく。訴えを大事にして関わっていく」と産婦の状況を観察し、訴えを聞くことが大事であると感じた。また途中から痛いと呼んでいた産婦にすごく動揺したが、助産師の声かけで意外に歩くことができたことから、「自分は冷静に関わって相手の方をちょっと落ち着けてあげられるような関わりが大事なのかな」と産婦の状態に巻き込まれずに冷静に関わることが大事であると感じていた。

①分娩展開の予想がつかず、不安と緊張状態であったが、分娩進行状態の診断には産婦の自覚症状の情報は欠かせないことがわかる。また産婦の状態に巻き込まれずに冷静に関わっていくことが大事であると思う。

3例目では「その人の合図というか、言葉、どういうことを言われたり、どういう表情で痛い時に表出されるのかっていうのを見ながら、個々の関わりが少しずつ分かってきたような気がします」と産婦の状況を捉え、足浴やマッサージ法、呼吸法などを考えながら実践していた。産婦に関わる時には「その人の一回の体験っていうところを意識しながら」と産婦にとっての体験であることを意識し、産婦の意思を尊重して、自分のできる最大限の関わりをしていた。そして「やっぱり信頼関係を作るのが、そこでできるんだらうなって気がします」とこの関わりを通して産婦と信頼関係が築けると感じていた。

②産婦にとっての分娩体験を意識し、産婦の意思を尊重した上で、産婦の身体状況を捉え、産痛緩和の援助を提供していく。このような関わりを通し、産婦との関係性を構築することができると感じる。

6例目では分娩室入室時期の判断が遅かったことを振り返り「CTG (cardiotocogram) をとることや内診をすることはわかっていたけれど、これらを連動して考えてはいなかったことがわかりました。やっていることを統合して分

娩室入室の時期を判断していかなければならない」ことに気づいた。さらに「自分がそういう判断をしながら行わないと、結果として産婦さんとの関係性も築けなくなってしまう」と産婦との関係性は適切な判断があってこそ築けるのだと感じた。また5例目が継続受持ちであったことから、「5事例目くらいから、産婦さんにとってのお産を考えるようになったと思います。また家族にとっても大事な出来事なんだなぁと感じることができました」と母と子を囲む家族の存在も考えるようになっていた。

③分娩進行状態を診断するには様々な情報を統合して判断していくことが必要である。この適切な判断の下産婦との関係性が築ける。さらに産婦にとっての満足なお産、家族にとってのお産を考える。

10例目では、急に胎児心音が低下するという状況になり、「異常の時にどういう風に動くことが求められるかということが少し分かった感じがします」とスタッフの迅速な対応を捉え、異常時の対応について少しわかったと感じていた。分娩後のレビューで産婦が冷静に状況を捉えていたことがわかり、「どんな状況だったとしても、きちんと説明する」「その人の体験に寄り添うのと、ん～客観的に見ている私たちが先入観を持たずに関わる方がいいのかな」とどのような状況においても落ち着き、産婦の体験に寄り添うことが大切であると感じていた。

④スタッフの動きから異常時の対応について少しわかったと感じる。どのような状況においても落ち着いて、産婦の体験に寄り添うことが大切であると思う。

〈学生D〉

学生Dの分娩介助での学びは以下の通りであった。

1例目は実際の分娩を体験して「何でもかんでも自分こうして欲しいし、みたいなのを出すんじゃなくてやっぱりお母さんの希望とか状態を見て、手助けする感じだなぁって」「やっぱりいろんなとこ見ないとだめだなぁっていうのも、

間接の人の動きも見て、お母さんも見て、会陰とか赤ちゃんの状態も見てって、練習では本当狭い範囲でしか見れてなくて」と分娩は産婦のペースに合わせることや産婦の状況を捉えることの必要性を感じた。そして「産婦さんにもっと添いたい」と思う。

①実際の分娩介助は練習とは違い、産婦のペースに合わせていくことや、会陰という狭い範囲ではなく、産婦の状況や分娩進行状況、スタッフの動きなどいろんな所を見ていかなければならないことに気づく。そして産婦に寄り添いたいと思う。

3例目では、それまで自分で分娩の進行状況を判断せず助産師の指導により行動していたが、「産婦さんの側について時期とか状態診断して、次何せんなんかとか、どうしてあげたら一番いいのかを考えていかないといけない。一緒にいるだけじゃだめだなあ」「CTGとか、器械だけで産婦さんのお腹の張りとか痛みをみるだけじゃだめだなと、ちゃんと触り、見たり聞いたりして」と自分で関わり、状況を捉えて判断していくことが大事であると気づいた。

②ただ産婦の側にいるのではなく、表情や呼吸など産婦の状態を捉えた上で分娩の進行状態の診断をしていくことが大事であることがわかる。

6例目では「痛いとか、辛いと言われて、その気持ちわかるんでとまっていた」「気持ちわかるだけなら、家族の人もできることで、自分は助産師だし、その立場だとちゃんと判断していろいろせんなんなと思った」と産婦の気持ちを受けとめるだけでなく、産婦の状況を捉え助産師として判断し行動していかなければいけないと考えるようになった。そして「ひしひしと感じるのは今まではいろいろやってもらって、できてるつもりになっていて、本当に見てもらってたんだ、ちゃんとできるようにならなきゃ」と6例目までを振り返り、もう一人でやっていけないといけないと感じていた。

③産婦の痛い・辛い思いを受けとめるだけでなく、産婦の状況に対し助産師として判断し行動

していくことが必要である。今まで助産師に助けられてきたが、一人でやっていけるようになりたいと思う。

10例目では「産婦さんの状況を見て、状態が変化してきて、そろそろCTGを取ろうとか、分娩室に入室する時期についてもスタッフの方に伝えていくことができた」「少し陣痛が弱くなっていて、このままでは進まないので一旦体位を変えて安楽な体位をとった」と産婦の状況を捉え、自分で考えスタッフと相談しながら、必要な援助を実践することができた。このことで自分の判断に自信がついたと感じていた。一方、急に産婦が「頭が痛い」と言われたことに対し「対処はできなかったんですけど、どんな状況なのかとその状況をよく観察しておこうと思った」と状況を観察していた。このことより急変に対してもまず状況を捉え、自分で考え判断し、行動できるようになりたいと感じた。

④産婦の状況を捉え、スタッフと相談しながら分娩促進のケアを実践し自分の判断に自信がついた。今後は急変に対しても自分で考え、判断し対応していけるようになりたいと思う。

考 察

以上の結果を踏まえて研究目的である学士課程で助産を選択する学生の分娩介助実習の学びについて考察する。E.Husserl¹⁵⁾は、人間は世界観に基づいて物事を認識しており、世界観の中には共通性の部分と個人により偏差がある部分があるとしている。一方、介助例数が進捗する中で、本研究の結果から学生の学びを概観すると、共通する学びが認められた。

分娩介助実習における学びの構造で述べたように、初めての分娩介助は想像と現実の違いに、戸惑いながら分娩という現象を感じ取るでは、前述のように、初めての分娩介助で導尿ができない場面や、会陰保護の力の入れ具合がわからないなど、想像していた分娩介助と違ったことに心は揺れながら時として怖さを体験していたと考えられた。

この状況は常盤ら¹⁶⁾が「分娩初期(1～3例)

では、学生が分娩現象や産婦に接し、分娩経過の流れを把握しながら基本的ケアの実践を通して産婦の反応をとらえる訓練をする時期」と述べていることと相似していた。しかし今回1例目、3例目と段階を追って分析した結果、1例目では分娩という現象そのものを五感を通して体感していたこと、実習前にVTRを見たり、モデルを使用し、実際の演習は行っているが、実際には児頭が下降してからの導尿や会陰切開、会陰保護や児の娩出時の骨重積の状況などは見て、触れて、感じる体験をしてみないと感覚として理解できず、「経験知」が重要であると考えられた。またこの体験にはわかったという感動だけでなく、戸惑いや時には怖さを伴っていることが判明した。このことより、1例目の分娩介助実習は、これまでに経験したことのない衝撃的な体験であり、1例後には学生が表出する戸惑いや怖さを十分に受けとめ、2例目からの学習に繋げる必要があると考えられた。

次に、結果2の構造で記述した**分娩進行状態の診断には産婦の身体状況を捉えることが必要であることを理解し、分娩進行を促進するケアを実践し、産婦に寄り添うことを大切にする**に関連しては、分娩第1期から陣痛室で産婦に関わることで産婦の表情や呼吸、産痛部位などの変化がわかり、分娩進行状態の診断には、器械だけでなく産婦の身体状況を捉えることが必要であると学んでいた。そして産婦の身体状況を理解することで分娩進行状態を診断し、産痛緩和や基本的ニーズを充足するなどの分娩進行を促進するケアを考え、実践することができていった。またケアを提供しながら、産婦に寄り添うことを大切にしており、産婦の心理状態や分娩体験を意識し、産婦にとって満足や安心感のあるお産を考えていた。

看護実践の経験からの学びの前提には、出会う相手との相互作用がなければならない。これらの学びは実際に産婦と関わり、相互作用を通して得られた学びといえる。統合カリキュラムによる助産教育を受けた学生のキャリア発達に関する研究¹⁷⁾では、その特徴とし『**寄り添うケアの実践**』というカテゴリーが抽出されている。産婦に寄り添い、ケアを実践できることが助産師のキャリアとして重要と捉えており、今回の結果とも一致し

ていると考えられた。

さらに、分娩進行状態を判断するには、必要な情報を総合的に考えることが必要であることも学んでいた。全国助産師教育協議会で提案された助産師教育のミニマム・リクワイアメントには¹⁸⁾、正常分娩における教育内容として『分娩進行状態の診断』、『分娩進行に伴う産婦と家族のケア』の内容があるが、今回の結果より『分娩進行状態の診断』の理解と『分娩第1期の産婦のケア』の実践は到達していると考えられた。

さらに構造の**自己の分娩介助経験を振り返り、学びと課題を確認する**については、実習も後半に入ったにもかかわらず、まだ自分が思うほどできていない状況から焦りや、自己の課題に気づき今後どうすればよいかを考えていた。また10例目では、「産婦との関係性の構築」や「スタッフと連携をとる」「状況を捉え自分で判断する」など、自分の課題としてきたことができるようになったと感じていたと考えられた。

J.Dewey¹⁹⁾は学習経験を「直接的経験」と「反省的経験」に分けて説明している。その直接的経験から、学生が反省的経験を繰り返しながら学んでいた。また本田²⁰⁾は「事後的に自分自身の実践を振り返ることは、経験を意味づけたり、吟味することであり、『実践知』を獲得していく上で必須の営みである」と述べている。実習中に自己の経験を振り返ることで、学生は経験からの学びを実践知として獲得していくものと考えられる。学士課程の実習は期間が限られていることより、学生は短時間で様々な経験を余儀なくされている。この経験からの学びを知識としていくためには、安酸²¹⁾のいうように、教師は学生の直接経験を捉え、経験の意味づけを行うことが必要と考えられた。したがって、学生と共に分娩介助を振り返り、そこでの経験や学びの意味づけをし、今後の課題を明確にする関わりが重要である。

おわりに、**分娩時の異常発生への対処はこれからの課題であると認識する**について考察する。学生は分娩介助10例を通して、「異常分娩を経験していない」、「異常時に速やかに対処できない」ことから、異常時の対処はこれからの課題であると認識していた。助産師教育の指導要領および基本

的考え方²²⁾では、分娩介助においては正常産を10回程度直接扱うことを目安としており、我部山ら²³⁾の報告では卒後教育として重要な内容に、産科救急や新生児蘇生の項目があげられていた。本研究結果を踏まえ、「異常時の対応」に関しては卒後教育での課題であると考えられた。

結 語

今回、学士課程で助産を選択する学生の分娩介助実習における学びを、A.Giorgiによる現象学的アプローチを参考に分析した結果、『学生の分娩介助実習における学びは、初めての分娩介助において想像と現実の違いに、戸惑いながら分娩という現象を感じ取る。そして分娩進行状態の診断には産婦の身体状況を捉えることが必要であることを理解し、分娩進行を促進するケアを実践しながら、産婦に寄り添うことを大切にする。一方自己の分娩介助経験を振り返り、学びと課題を確認する。10例終了後に、分娩時の異常発生への対処はこれからの課題であることを認識するという過程である』という構造が導き出された。

本研究の限界と今後の課題

本研究の結果は、教員が4名の研究協力者にインタビューを行いその体験から得られたものである。学生と教員という関係が学生の語る内容に影響があるということ踏まえた上での学生の学びである。しかし例数を重ねていくことで、分娩介助実習における学生の学びを明確にすることは可能であると考え、学びの構造をもとに学生の状況に応じた教授活動の展開に繋げていきたい。

引用文献

- 1) 大学・短期大学における看護学教育の充実に関する調査協力者会議：指定規則改正への対応を通して追究する大学・短期大学における看護学教育の発展。2007.
- 2) 厚生労働省医政局看護課：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書。2007.
- 3) 全国助産師教育協議会：第93回助産師国家試験合格状況。
<http://www.zenjomid.org/midwife/passrate.html#pass-01>
- 4) 伊藤美栄, 川崎純子, 澤本万紀子：分娩介助実習到達度の分析 日本助産学会誌18(3)：308-309, 2005.
- 5) 皮野さよみ, 伊藤美子, 大村倫子, 澤本万紀子, 土山美由紀, 佐藤弘子：助産師基礎教育における分娩介助技術到達度の実態 日本助産学会誌20(3)：130-131, 2007.
- 6) 渡邊典子, 小田切房子, 熊澤美奈好, 江幡芳枝, 黒田緑, 全国助産師教育協議会分娩実習改善検討委員会：大学・短大専攻科・専門学校における助産師教育の実態と分娩介助・継続事例実習指針 到達状況の比較及び分娩介助・継続事例実習指針. 助産雑誌61(4)：344-351, 2007.
- 7) 岩木宏子：助産婦学生の分娩介助実習における学びの積み重ねについて—学生の視座に基づく学びの積み重ねのプロセス—. 日本助産学会誌10(1)：36-43, 1996.
- 8) 新道幸恵：看護系大学の統合カリキュラムにおける助産師教育の到達目標に関する検討. 研究成果報告書 2009.
- 9) 常盤洋子, 今関節子：4年制大学における分娩介助実習の効果的な教授法の検討, 助産婦雑誌56(6)：69-75, 2002.
- 10) A.kolb: Learning Styles and Learning Spaces Enhancing Experiential Learning in Higher Education Academy of Management Learning&Education 4(2):193-212, 2005.
- 11) E.Husserl: ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学. 細谷恒夫, 木田元訳, 中央公論新社, 東京, 2006.
- 12) E.Husserl: 現象学の理念. 長谷川宏訳, 作品社, 東京, 2008.
- 13) A.Giorgi: The Descriptive Phenomenology Method in Psychology. A Modified Husserlian Approach. Duquesne University Press, Pittsburgh, Pennsylvania, 2009.
- 14) A.Giorgi: Description versus Interpretation Competing Alternative

- Strategies for Qualitative Research Journal of Phenomenological Psychology, 23(2):119-135, 1992.
- 15) 竹田青嗣：現象学は＜思考の原理＞である。ちくま新書，東京，2008.
- 16) 9)に同
- 17) 8)に同
- 18) 全国助産師教育協議会教育検討委員会:助産師教育の改善に向けあり方検討コア・コンピテンシー修得の基盤。2008.
- 19) J.dewey：経験と教育。市村尚久訳，講談社学術文庫，東京，2008.
- 20) 本田多美枝：看護における「リフレクション(reflection)」に関する文献的考察。Quality Nursing 7(10):53-59, 2001.
- 21) 安酸史子：経験型の実習教育の提案。看護教育38(11):902-913, 1997.
- 22) 2)に同
- 23) 我部山キヨ子，岡島文恵：助産師の卒後教育に関する研究。母性衛生51(1):198-205, 2010.

The Learning of Undergraduate Students Selecting in Midwifery in 10 Cases of Childbirth Care

—Focusing on Practical Experience of Childbirth Care—

Hiromi MATSUI¹⁾, Kuniko NAGAYAMA¹⁾, Keiko SHIMADA²⁾

1)Graduate School of Medicine and Pharmaceutical Sciences for
Research, University of Toyama

2)Graduate Course of Nursing Science, Division of Health Sciences,
Graduate School of Medical Science, Kanazawa University

Abstract

The purpose of this study is to clarify the learning process of the undergraduate students selecting in midwifery based on their experience in 10 cases of childbirth care. This is a qualitative descriptive study utilizing the phenomenological approach. The result is summarized as follows.

The structure of learning of students was found. The students took in the phenomenon of childbirth while they were perplexed over the difference between the reality of their first childbirth care and how they imagined it. They understood the need to document the laboring mother's physical condition for the diagnosis of the childbirth progress. They conducted practices that promoted the childbirth progress, and put value in being close to the laboring mother. Their reflection on the delivery experience confirmed what they have learned and the challenged they still have to face. They recognized that what to do in abnormal delivery cases will be their future challenge.

Key words

undergraduate, childbirth care, learning phenomenological approach